長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第30集

長岡京跡右京第751次
発掘調査報告

２００３

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

（１）ＪＲ長岡京駅から西山遠景（東から）

（２）調査地周辺（西から）

（１）南調査区全景（北から）

（２）北調査区全景（南から）

序　　　文

平成10年度から開始された長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業も本年度で４年目となりました。この地区は長岡京跡右京六条一坊という長岡京域のほぼ中央部にあたるとともに、近世勝龍寺城跡や神足遺跡の西半部にも該当する場所で、新しい都市づくりへの期待と同時に、都城や城館、集落遺跡というかつての都市づくりの解明という意味でも成果が期待されるところです。

ここに報告する調査は、市街地再開発に伴って道路を拡幅するという、長岡京駅前線整備事業に関する埋蔵文化財発掘調査です。この道路はJR長岡京駅から長岡天満宮に向かう東西方向の道路で、当市の幹線道路の一つとなっています。市街地のため、複数次に分割した調査がこれまで継続されており、すでに長岡京市埋蔵文化財報告書第16・24・28集として報告されております。

これらの調査成果を有効に活用し、道路周辺部の成果と合わせて、長岡京跡をはじめとする市街地内の遺跡の解明に努力しているところです。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成１５年２月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

凡　　　例

1．本書は、長岡京市開田二丁目において、2002（平成14）年10月22日から11月25日まで実施した長岡京跡右京第751次調査の調査報告書である。

2．調査は、長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業の長岡京駅前線埋蔵文化財発掘調査（A-18）として長岡京駅西口地区市街地再開発組合の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。現地調査は、同センター調査係主査中島皆夫が担当した。

3．調査対象となった遺跡は、長岡京跡右京六条一坊十四町、開田遺跡、神足遺跡である。

4．本調査の正式名称は、長岡京跡右京第751次（７ＡＮＫＳＭ－10地区）調査である。長岡京跡の調査次数は右京域での通算調査件数を示す。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の分類表示、後半が高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』（1977年）の旧字名による地区割りと地区内での調査回数を意味する。ＫＳＭは開田小字下ノ町の地区名略表記である。

5．本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。

6．本書では国土座標旧座標系の第VI系を使用した。

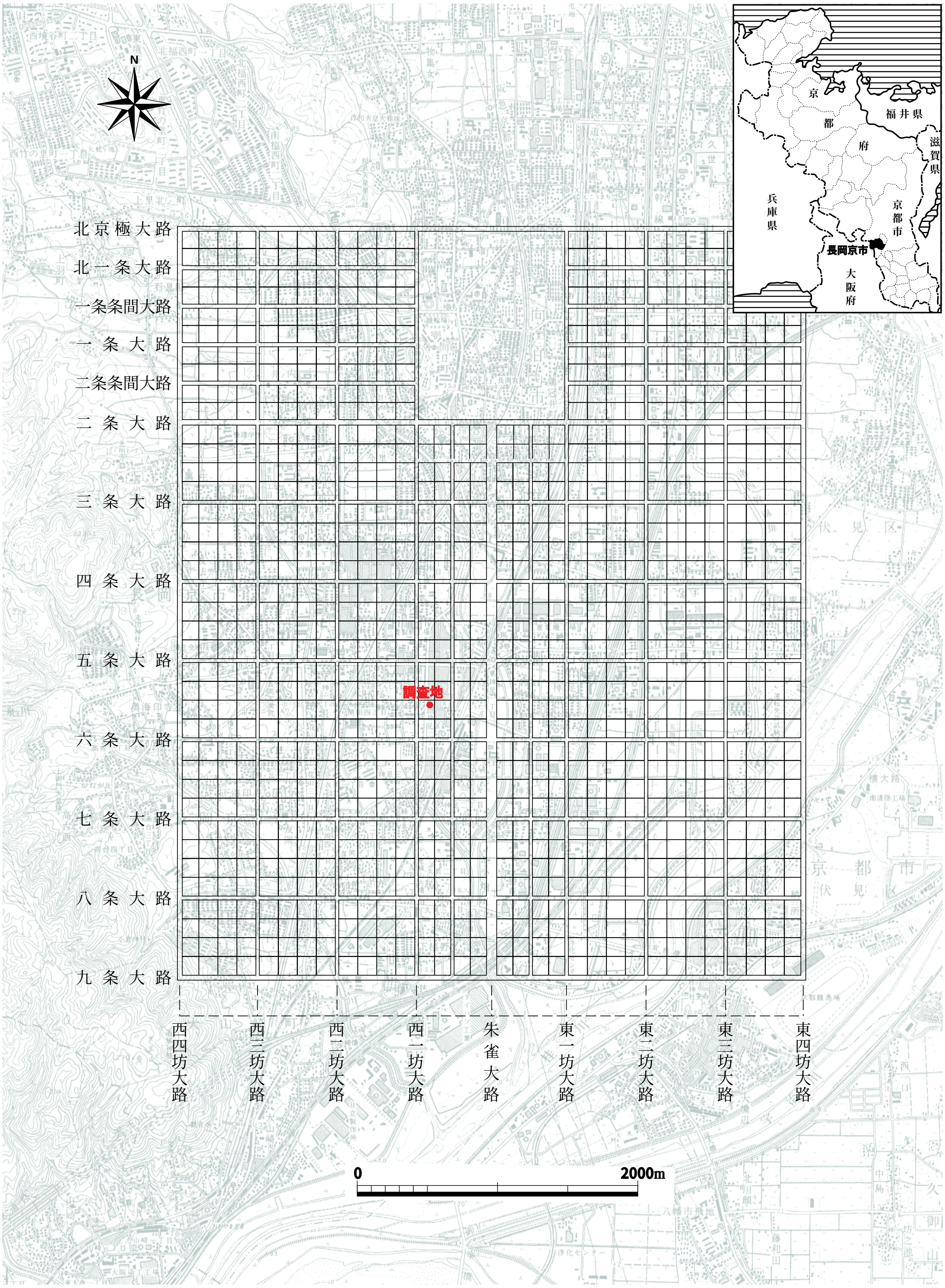
7．本書挿図の土層名で＜　＞を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のＪＩＳ表記法による土色である。

8．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

9．遺物写真は中島、小田桐淳が撮影を行った。

10．本書は中島が執筆および編集を担当した。

※　本書表紙のカットは柱穴Ｐ49出土の炉壁


N
北京極大路
北一条大路
一条条間大路
一　条　大　路
二条条間大路
二　条　大　路
三　条　大　路
四　条　大　路
五　条　大　路
六　条　大　路
七　条　大　路
八　条　大　路
九　条　大　路
調査地
西四坊大路
西三坊大路
西二坊大路
西一坊大路
朱雀大路
東一坊大路
東二坊大路
東三坊大路
東四坊大路
0
2000m
京都府
福井県
滋賀県
兵庫県
京都市
長岡京市
大阪府
伏見区
京都市
伏見区

本　文　目　次

	序　　文	ⅰ
	凡　　例	ⅱ
1	はじめに	1
2	調査経過	1
3	検出遺構	2
	（1）近世の遺構	4
	（2）中世の遺構	4
	（3）長岡京期以前の遺構	5
	（4）時期不明の遺構	6
4	出土遺物	7
5	まとめ	8
	（1）長岡京期	9
	（2）中世	9

図　版　目　次

巻頭図版１（１）ＪＲ長岡京駅から西山遠景（東から）
　　　　　　（２）調査地周辺（西から）
巻頭図版２（１）南調査区全景（北から）
　　　　　　（２）北調査区全景（南から）

図版　１（１）南調査区中近世遺構（北から）
　　　　（２）南調査区完掘状況（北から）
図版　２（１）北調査区中近世遺構（南から）
　　　　（２）北調査区完掘状況（北西から）
図版　３（１）溝ＳD01（南から）
　　　　（２）柵ＳA11・12（西から）
　　　　（３）土坑ＳK10（北から）
　　　　（４）土坑ＳK08（南東から）
　　　　（５）溝ＳD07（西から）
　　　　（６）土坑ＳK13（南から）
図版　４（１）南調査区溝ＳD03（北西から）
　　　　（２）北調査区溝ＳD03（北西から）
　　　　（３）出土遺物

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）　iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）　1
第３図　調査前風景（北から）　2
第４図　北調査区作業風景（南東から）　2
第５図　検出遺構図・土層図（1/100）　3
第６図　柵ＳA11実測図（1/50）　4
第７図　柵ＳA11柱穴Ｐ２（南から）　4
第８図　柵ＳA12実測図（1/50）　4
第９図　柵ＳA12柱穴Ｐ３（北から）　4
第10図　土坑ＳK10実測図（1/50）　4
第11図　土坑ＳK08実測図（1/50）　4
第12図　土坑ＳK09実測図（1/50）　5
第13図　土坑ＳK13実測図（1/50）　5
第14図　土坑ＳK13（南から）　5
第15図　溝ＳD03（1/100・1/50）　6
第16図　溝ＳD03断面Ａ・Ｃ～Ｅ（南東から）　6
第17図　土坑ＳK02実測図（1/50）　6
第18図　出土遺物実測図（1/4・1/2）　7
第19図　調査地周辺の長岡京期検出遺構図（1/2000）　8

付　表　目　次

付表－１　周辺地域の中世調査成果一覧表　9
付表－２　報告書抄録　10

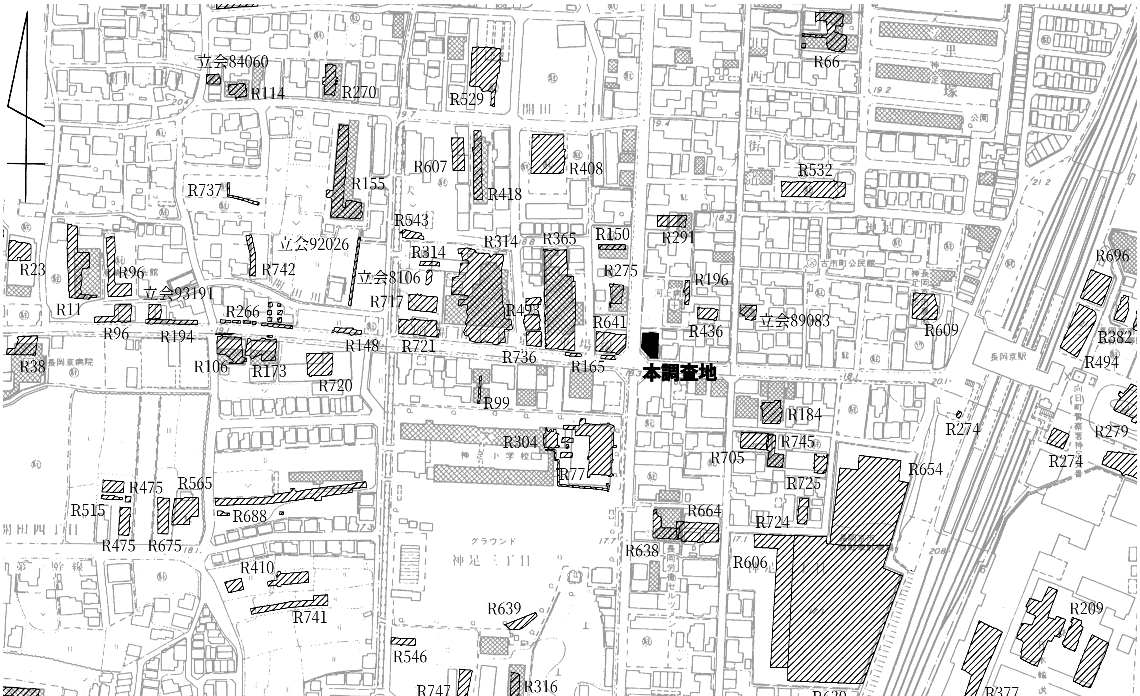
1　はじめに

本調査は長岡京駅西口地区市街地再開発組合の長岡京駅前線埋蔵文化財発掘調査（A-18）として実施した。調査地はＪＲ長岡京駅の西約250mの長岡京市開田二丁目地内に位置し、調査は府道御陵山崎線と市道長岡京駅前線の交差点北東角地における道路拡幅工事に伴うものである。

周辺の自然地形は安定した低位段丘に分類され、付近は北から南へ緩やかに傾斜している[注1]。調査地は長岡京跡右京六条一坊十四町の北西部にあたり、右京第365次調査[2]の成果から北約20mに六条条間小路南側溝、西約30mに西一坊大路東側溝が想定される。右京六条一坊十四町については、右京第606次調査[3]などで確認された大規模な掘立柱建物群が四町域を占有する場合、その北西町に相当することが指摘された[4]。また、府道を挟んで実施された右京第641次調査[5]では長岡京期の溝状土坑が検出されており、同調査および四町域の周辺部で実施された数回の調査から、この四町域の周囲に大規模な溝が巡る可能性も指摘されている[6]。しかし、当地は溝推定位置のやや南にあたり、残念ながら溝の有無を確認することはできなかった。調査地は神足遺跡と開田遺跡の推定範囲が重複する場所にも相当する。しかし、周辺で実施された調査では長岡京期以外の目立った成果が少ないため、神足遺跡、開田遺跡の周辺地域の様相は明らかになっていない。

2　調査経過

調査では区域内に重機掘削で除去した盛土、人力によるあげ土の仮置き場所を確保する必要があった。また、調査対象地の面積が狭小であったため、調査は対象地内を南北２つの調査区に分



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

割し順に行っている。10月22日から南半部の調査作業に着手し、この部分での掘削・記録作業が終了した10月30日から、南半部の埋め戻しと北半部の重機掘削を行った。北半部の掘削・記録作業が終了し、機材撤去など復旧作業の全てが完了したのは11月25日であった。

なお、南北調査区の重複を除いた総調査面積は160㎡を測り、調査区の中心は第Ⅵ座標系のＹ＝−27,321、Ｘ＝−119,718に位置していた。

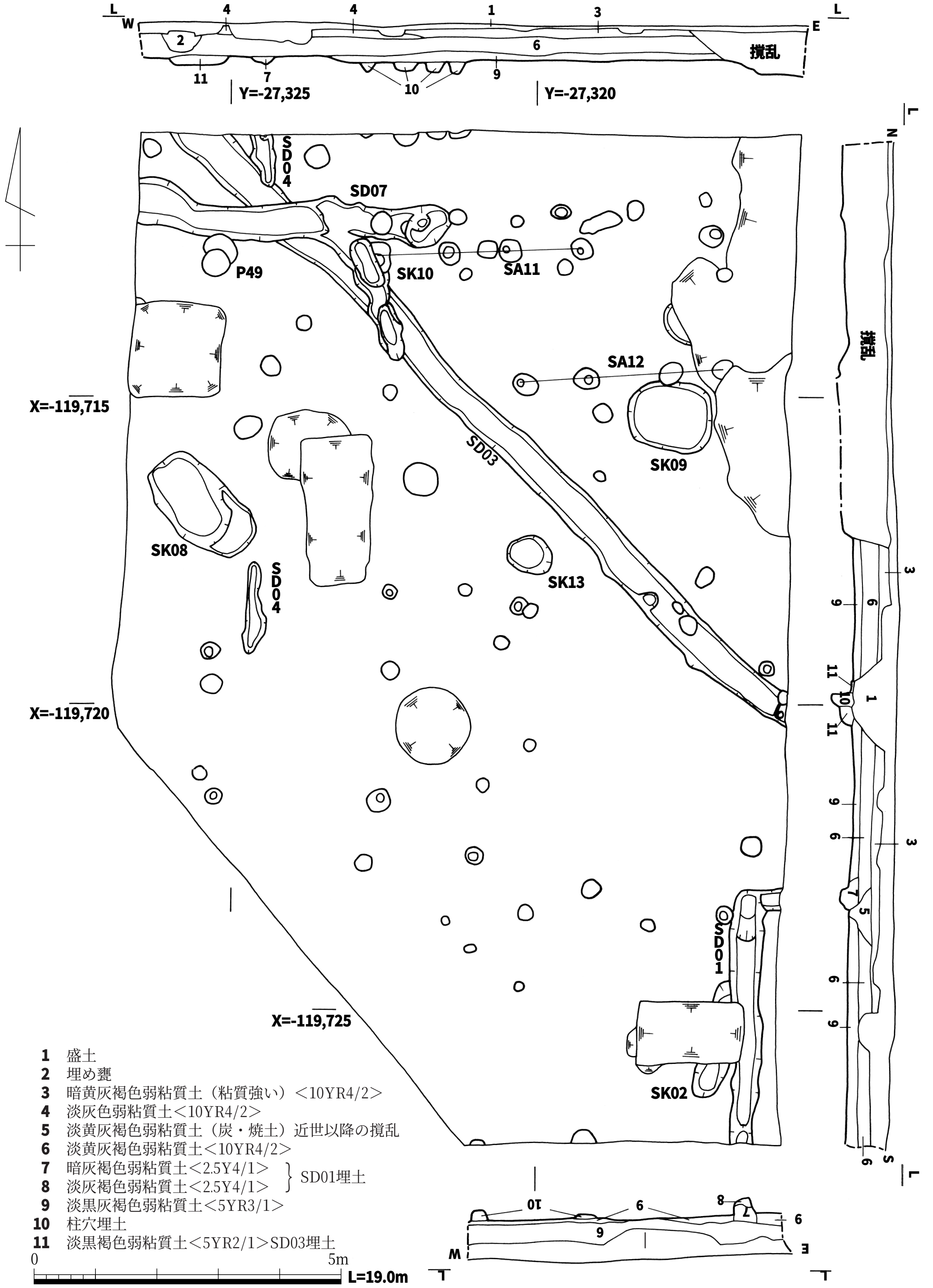
３　検出遺構

基本層序（第５図）　調査地は再開発事業が始まるまで屋敷地であったため、全域に厚さ0.3m前後の盛土が施されている。しかし、1947年米軍撮影の航空写真からは当地が畑地であったことが窺え、この盛土が戦後に施されたものであることが分かる。現地表面（盛土上面）の標高は調査区北端で18.8m、南端が18.7mを測る。盛土の下には薮土状の黄灰褐色土が２層（第３・６層）あり、それぞれ厚さ0.2m前後を測る。第６層から掘り込まれた撹乱坑の中からは、寛永通寶と考えられる銭貨が出土しており、黄灰褐色土が形成された時期の一端を窺うことができた。第６層の下には厚さ0.1〜0.2mの黒灰褐色土（第９層）が認められる。第９層の分布は一様でなく、調査区西半部は東半部に比較して薄く、確認できない範囲もあった。第９層を完全に除去した段階で地山面が現れる。地山は黄褐色粘質土を主体としているが、調査区の南西隅では茶褐色粘質土、茶褐色砂礫土などが認められた。地山面の標高は調査区北端が18.2m、南端で18.1mを測り、北西から南東方向へ緩やかに傾斜していた。

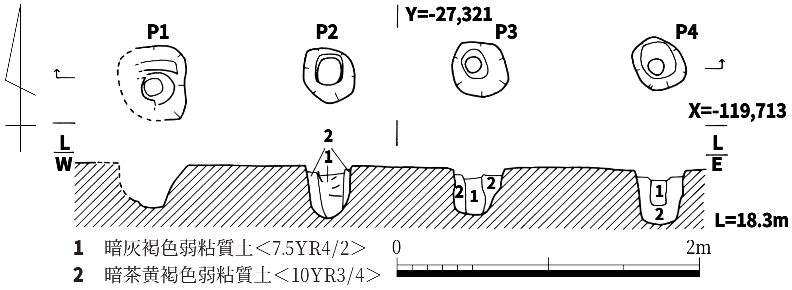
調査で確認したのは溝４条、土坑５基、柵２条の他、並びの明らかでない柱穴が64基を数えた。所属時期には近世、中世、長岡京期、古墳時代以前のものがある。

第３図　調査前風景（北から）

第４図　北調査区作業風景（南東から）

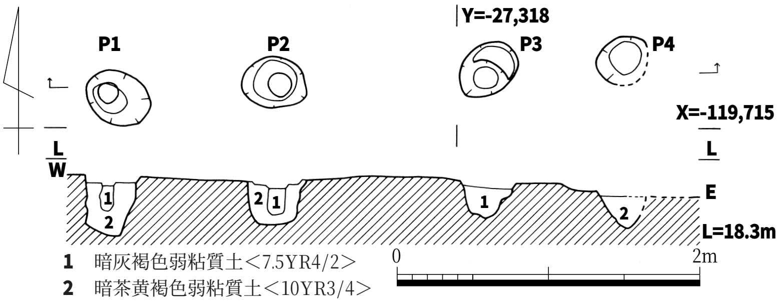


第５図　検出遺構図・土層図（1/100）

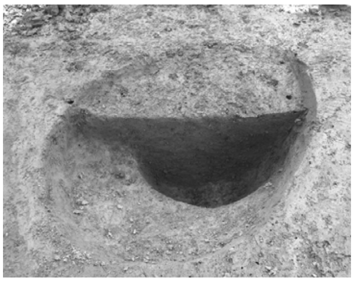


第６図　柵ＳＡ11実測図（1/50）

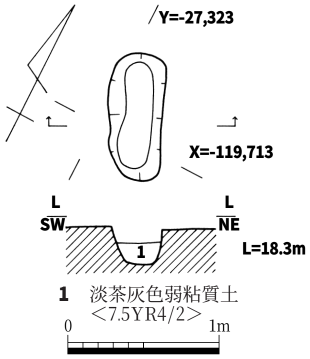
第７図　柵ＳＡ11Ｐ２（南から）



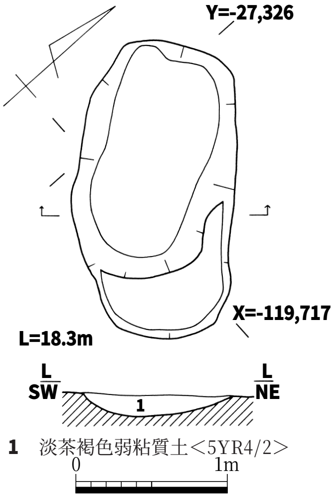
第８図　柵ＳＡ12実測図（1/50）



第９図　柵ＳＡ12Ｐ３（北から）



第10図　土坑ＳＫ10実測図
（1/50）



第11図　土坑ＳＫ08実測図
（1/50）

（１）近世の遺構

溝ＳＤ01（第５図）　調査区の南東隅で確認した幅約0.4mの溝で、調査区南辺から約４m北の位置で東へ直角に折れ曲がる。深さは0.15～0.3mを測り、南側に向かって深く掘削されている。灰色系の埋土からは土師器、近世陶器、中世銭貨が出土した。

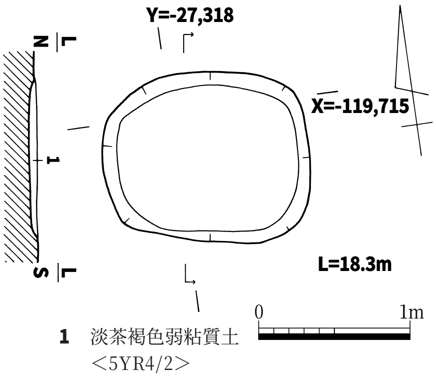
溝ＳＤ04（第５図）　調査区西側の北辺と中央部で、幅0.1m程度の小規模な南北溝を確認した。北辺と中央部の間は失われているが、本来一連の溝であったと考えられる。また、中央部より南では溝の痕跡を確認できなかった。遺物は出土していないが、埋土は溝ＳＤ01と同様な灰色系の埋土を呈している。

柱穴（第５図）　溝ＳＤ01・04と同様な灰色系の埋土を有する柱穴を２基確認したが、埋土に遺物は含まれていなかった。

（２）中世の遺構

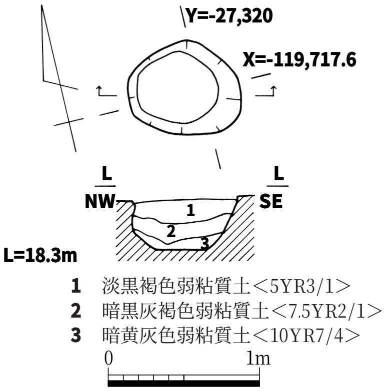
柵ＳＡ11（第６・７図）　調査区北辺で確認した４基の柱穴で構成される。柵は東西方向を指向するが、東に対して北へ５°振っていた。柱間は３間であり、その間隔は西から1.1m、１m、1.2mを測る。各柱掘形は直径0.3m程度の不整円形で、深さが0.35m前後を測る。また、各柱穴とも直径0.15m程度の柱抜き取り痕跡が認められた。柵ＳＡ11の柱穴Ｐ２では柱抜き取り穴から土師器、瓦器椀が出土している。柱穴Ｐ１は後述の土坑ＳＫ10と重複しており、より古い段階であることが分る。

柵ＳＡ12（第８・９図）　柵ＳＡ12は前述した柵ＳＡ11の南2.2mにあり、その方向は柵ＳＡ11に一致していた。柵ＳＡ12の柱間は３間であり、その間隔は西から1.1m、1.3mを測る。各柱掘形は直径0.4m程度の不整円形で、深さが0.3～0.4mを測る。柱穴Ｐ１・２には直径0.15m程度の柱抜き取り痕跡が認められた。柵ＳＡ11と並行することからほぼ同時期のものと考えられる。



第12図　土坑ＳＫ09実測図（1/50）

溝ＳＤ07（第５図）　調査区の北西部で検出した東西溝であるが、輪郭は比較的不明瞭で直線的ではない。また、西壁から約４ｍの位置で南方へ延びる溝に分岐している。溝の規模は幅0.4～0.8mで深さ0.15m前後を測り、底部は西から東へ緩やかに傾斜している。溝埋土は茶灰色系を呈し、僅かに土師器片が含まれていた。



第13図　土坑ＳＫ13実測図（1/50）

土坑ＳＫ08（第11図）　調査区西辺で確認した楕円形を呈する土坑で、主軸は北に対して45°西に振る。土坑は平面規模に対して浅いもので、主軸方向の長さ約２m、幅約１m、深さ0.1m前後を測る。土坑埋土は茶褐色を呈しており、土師器、瓦器の細片が出土している。

土坑ＳＫ09（第12図）　調査区北東部で確認した円形に近い形状の土坑であり、ほぼ東西方向の長軸1.4m、幅1.1mで、深さは0.1mに満たない。土師器、瓦質土器の羽釜が出土している。

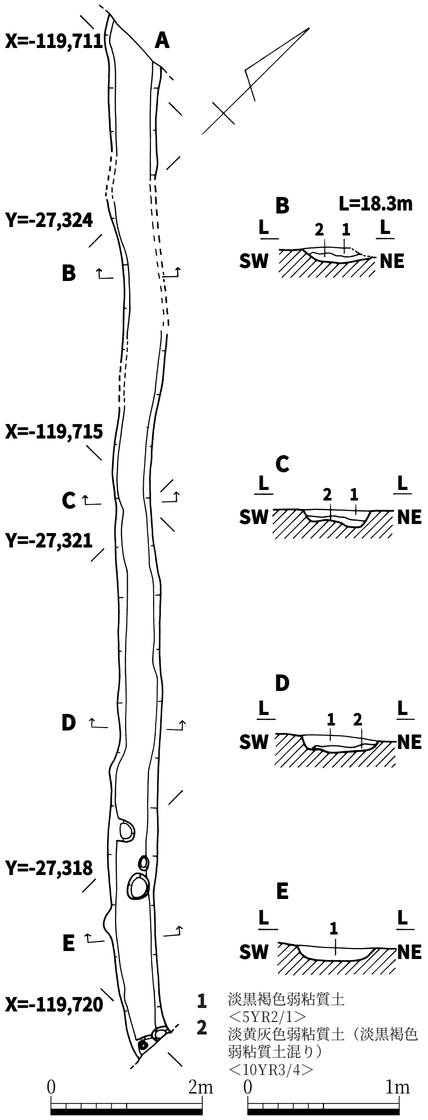
土坑ＳＫ10（第10図）　溝ＳＤ07の南方に分岐する溝と重複して確認した土坑で、溝ＳＤ07より古い時期の遺構である。土坑の平面形態は細長い楕円形を呈し、主軸が北に対して25°西へ振っている。主軸方向の長さ0.8m、幅0.4mで、深さは0.25m前後を測る。土坑埋土からは土師器、瓦器の細片が出土している。

第14図　土坑ＳＫ13（南から）

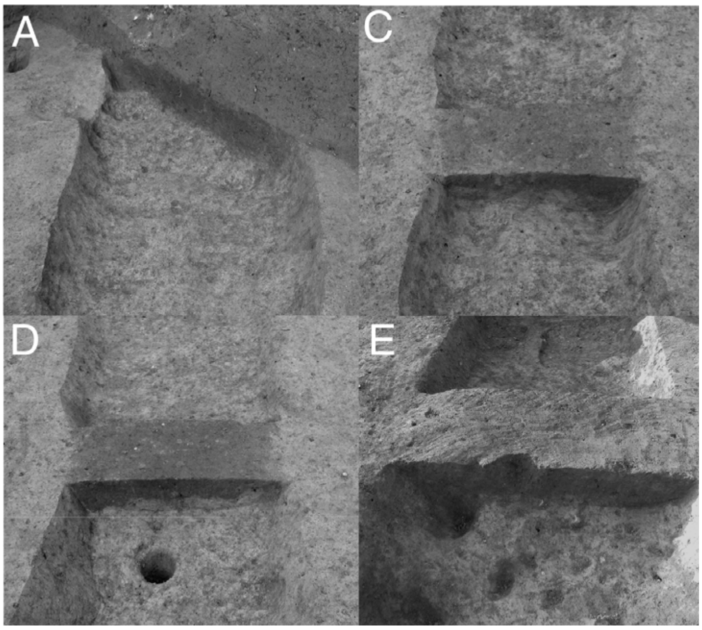
柱穴（第５図）　茶灰色ないし茶褐色系の埋土を持つ柱穴を中世のものと想定した。柱穴は調査区の北半部を中心に52基を確認しているが、建物や柵として把握できるものはない。

（３）長岡京期以前の遺構

土坑ＳＫ13（第13・14図）　調査区のほぼ中央部で確認した楕円形を呈する土坑である。土坑の主軸は北に対して60°西へ振る方向で、主軸方向の長さ0.8m、幅0.6mで深さ0.3mを測る。埋土の最上層はよく締まった性質で、色調は黒褐色を呈していた。土坑からは土師器杯Ｂ、須恵器杯Ａなど長岡京期の土器が出土している。



第15図　溝ＳＤ03（1/100・1/50）



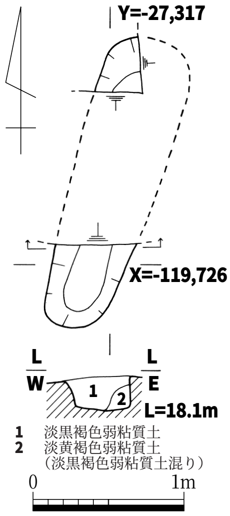
第16図　溝ＳＤ03断面Ａ・Ｃ～Ｅ（南東から）

溝ＳＤ03（第15・16図）　溝ＳＤ03は調査区の北半部を北西から南東方向に横切る斜行溝で、調査では約14ｍにわたって確認することができた。溝の方位は北に対して45゜西へ振っており、溝の規模は幅0.5～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土の最上層は長岡京期の土坑ＳＫ13最上層と同じ黒褐色土であるが、土坑ＳＫ13に比べて粘性が弱く締まりの悪い土質であった。黒褐色土を埋土とする遺構は、土坑ＳＫ13の他には柱穴数基があるだけで、溝ＳＤ03に関連する遺構は検出できなかった。また、溝ＳＤ03の埋土には少量の土師器片が含まれていただけで、溝の詳細な時期も明らかでない。しかし、中世、近世の溝や柱穴との重複関係から、より古い段階の遺構と判断できる。

柱穴（第５図）　土坑ＳＫ13、溝ＳＤ03と同様な黒褐色系の埋土を持つ柱穴を長岡京期以前と推定した。しかし、中世の柱穴と同様、出土遺物がほとんど認められないため柱穴の時期は確定できない。柱穴は調査区の南半部を中心に10基を確認しているが、建物や柵として把握できるものはない。

（４）時期不明の遺構

土坑ＳＫ02（第17図）　撹乱坑と溝ＳＤ01によって遺構の輪郭が失われているが、長軸２ｍ程度で長方形を呈する土坑と考えられる。土坑の主軸は北に対して15゜東へ振っており、幅0.5ｍ、深さ0.3ｍ程度を測る。出土遺物がほとんど無く、類似する埋土の遺構も認められないため、土坑の時期を推測できなかった。



第17図　土坑ＳＫ02
実測図（1/50）

４　出土遺物

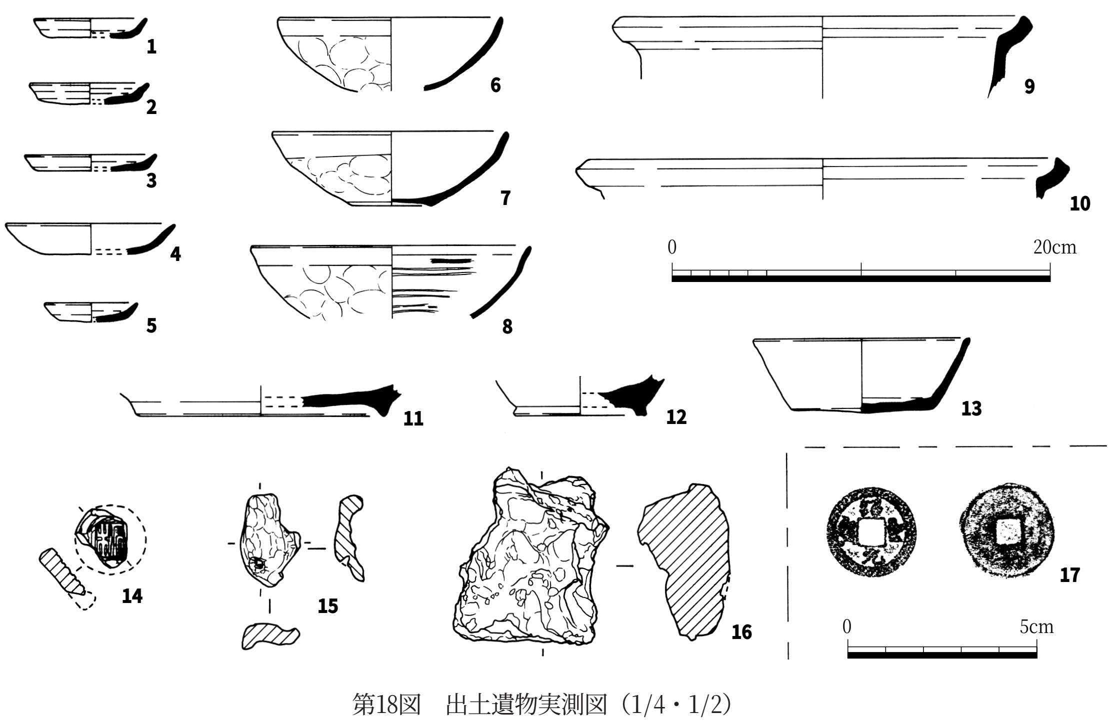
本調査では整理箱にして１箱の遺物が出土した。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、土製品、炉壁、中近世銭貨があり、時期的には近世、中世、長岡京期のものが認められた。主な出土遺物を第18図に示したが、その数は限られている。

（１）近世の遺物

近世の特徴的な遺物には撹乱坑や第６層から出土した泥面子（14）、伏見人形（15)、寛永通寶がある。泥面子は直径3.8㎝を測り、表面に印章状の文字を陽刻する。伏見人形は種類が明らかでない破片で、深さ0.5㎝程度の刺突が認められる。溝ＳＤ01からは土師器、唐津焼の小片が出土しているが、総じて遺構には遺物が含まれていなかった。

（２）中世の遺物

土師器（１～５)、瓦器（６～10)、炉壁（16)、中世銭貨（17）の他に須恵器、陶磁器がある。量的な多少はあるが、中世の柵、土坑、溝からは遺物が出土しており、遺構の分布とともに本調査において最も目立った時期といえる。柵ＳA11柱穴Ｐ２の柱抜き取り穴からは土師器皿（１～４)、瓦器椀（６～８）が出土している。土師器皿には口径６～７㎝の１～３、一回り大きく口径が約９㎝の４がある。瓦器椀は口径12～15.5㎝を測り、いずれも焼き締まりの悪いものであった。７はほぼ完全な形に復元できる個体で、口径12.6㎝で器高3.9㎝を測り、底部には不明瞭な高台が貼り付けられる。その他の遺構では、土坑ＳK09から土師器小皿（５）と瓦器鍋（10)、溝ＳD07でも瓦器鍋（９）が出土した。16の炉壁は調査区北西の柱穴Ｐ49から出土した。長さ９㎝程度の断片であり、内面の融着物から鉄製品に関連する炉壁と考えられる。また、側面には部分的に整っ



第18図　出土遺物実測図（1/4・1/2）

た面が認められるが、この面は炉構築過程の粘土帯積み上げ痕跡を示すものと考えられる。17の中世銭貨は近世の溝ＳＤ01から出土した。北宋銭の紹聖元寳で1094年の初鋳である。

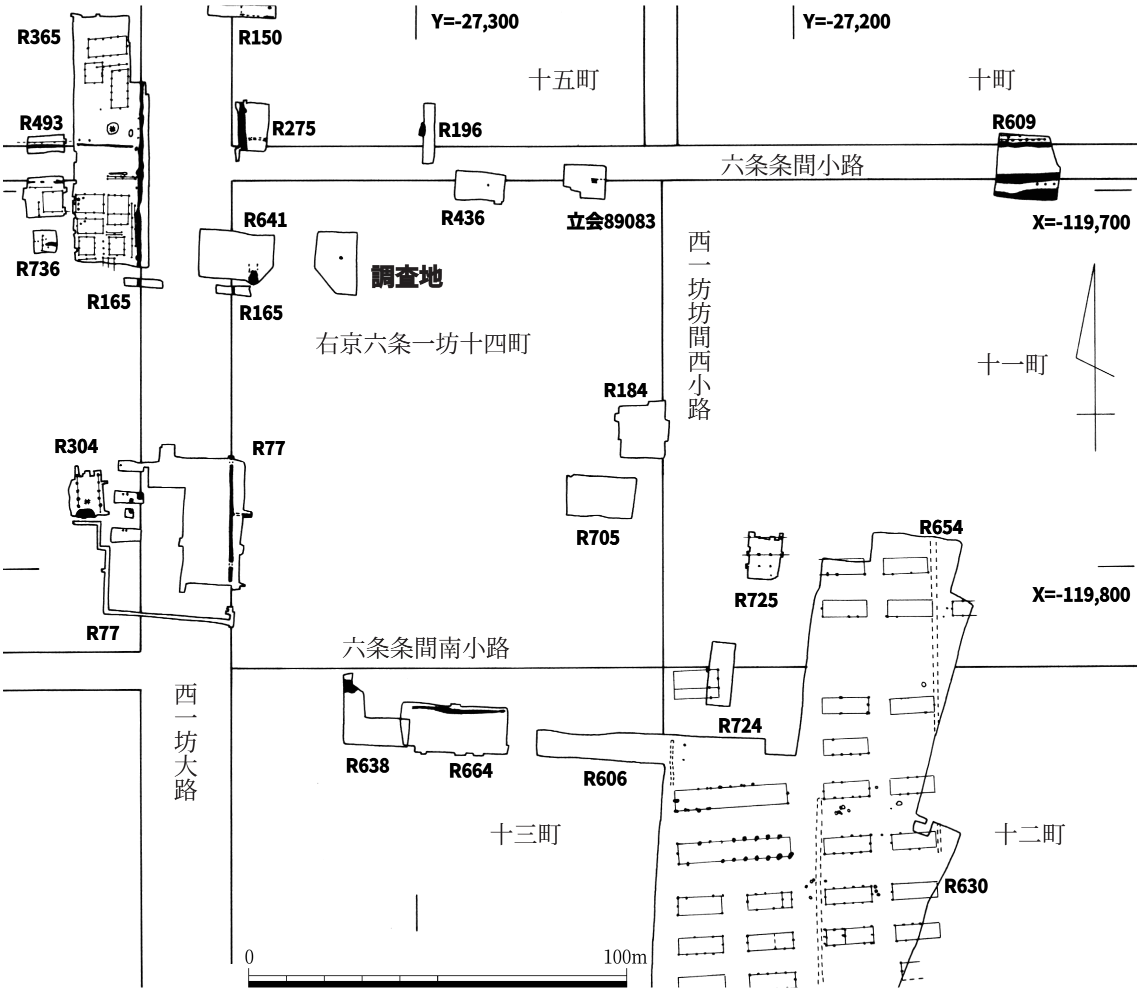
（３）長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には土坑ＳＫ13から出土した土師器（11）、須恵器（13）と、第９層の須恵器（12）がある。11は土師器杯Ｂと考えられるもので、高台径が13.4㎝を測る。13の須恵器杯Ａは口縁部が直線的に外傾する形態で、口径11.6㎝、器高3.9㎝を測る。12は須恵器壺Mと考えられる破片であり、高台径が6.9㎝を測る。

長岡京期以前と考えた斜行溝ＳＤ03からは土師器が少量出土しているが、いずれも小片で時期的な特徴を窺えない破片であった。

5　まとめ

本調査では中世の遺構、遺物が確認されたが、期待されていた長岡京跡や弥生時代・古墳時代の開田・神足遺跡に関わる調査成果は少なかった。しかし、中世の土坑、柵を検出できたことで、中世開田・神足遺跡の範囲や両集落の関わりを検討するための資料が得られたと言える。



第19図　調査地周辺の長岡京期検出遺構図（1/2000）

（1）長岡京期

本調査における長岡京期の検出遺構は土坑１基だけであったが、今回の調査範囲と条坊道路の位置関係などは周辺調査地の成果によって明らかにできる（第19図）。また、当地を含む右京六条一坊十四町が、右京第630・654次調査地で確認された大規模建物群の推定範囲に当たるのは前述したとおりである。しかし、十四町内のこれまでの発掘調査は宅地域の周辺部に相当するものが多く、大規模建物群の展開など重要な課題は明らかになっていない。今回の調査では長岡京期の遺構が希薄であったが、当地では中世から近世における土地の削平や改変の影響を考慮しなければならず、その様相をもって十四町域内全体の評価を行うことは困難である。宅地内中心部で行われる今後の発掘調査、十四町の東と南を画する西一坊坊間西小路、六条条間南小路の施行状況などを総合して検討する必要がある。

（2）中世

今回の調査で最も多くの遺構、遺物を確認できたのは鎌倉時代後半期頃のものである。付表－１には周辺地域における中世の検出遺構を、本調査地を中心に仮に北西・北東・南西・南東の４区域に分けて示した。右京第184・630次調査地などが含まれる南東区域では建物、井戸、溝などの遺構が確認されており、他の区域に比べて中世の調査成果が目立っている。さらに、付表－１にその成果を収めることができなかったが、右京第705次調査地の東隣りで行われた右京第745次調査[7]でも数多くの遺構が検出されている。このように南東区域には中世集落が想定されるが、その範囲や性格、江戸時代前半期の近世勝龍寺城跡や神足集落との関連、前段階である平安時代の

付表－１　周辺地域の中世調査成果一覧表

区域	調査次数	調査区中心座標		面積㎡	中世の検出遺構						報告書
		Y	X		溝	建物	柵	柱穴	土坑	井戸	
北西	R150	-27,346	-119,652	60							センター年報　昭和58年度
	R165	-27,373	-119,724	44	○						府センター概報　第15冊
	R275	-27,344	-119,683	147							センター年報　昭和62年度
	R365	-27,382	-119,684	1,372							センター報告書　第10集
	R493	-27,399	-119,704	148							センター年報　平成７年度
	R641	-27,348	-119,718	241							センター報告書　第16集
	R736	-27,398	-119,714	88							センター報告書　第28集
北東	R196	-27,297	-119,685	50				○			センター年報　昭和60年度
	R291	-27,307	-119,637	146							センター年報　昭和62年度
	R436	-27,283	-119,698	98	○			○			センター年報　平成５年度
	R532	-27,213	-119,613	416							センター年報　平成８年度
	R609	-27,138	-119,694	260	○						センター年報　平成10年度
南西	R77	-27,356	-119,776	580							市報告書　第９冊
	R99	-27,434	-119,749	27							センター年報　昭和57年度
	R304	-27,388	-119,779	81							センター年報　昭和63年度
	R638	-27,316	-119,843	167	○		○	○			センター報告書　第15集
南東	R184	-27,241	-119,764	192	○	○			○	○	センター年報　昭和59年度
	R630	-27,190	-119,900	4,350		○					センター報告書　第26集
	R654	-27,174	-119,819	1,755	○	○			○		センター報告書　第26集
	R664	-27,290	-119,842	353	○			○	○		センター報告書　第18集
	R705	-27,252	-119,782	209	○			○	○		センター報告書　第25集
	R724	-27,219	-119,827	107							センター報告書　第25集
	R725	-27,208	-119,796	96							センター報告書　第25集

様相などは明らかでない。本調査で出土した炉壁片についても、今後調査成果の蓄積によってその評価を定めることができるだろう。一方、北西区域と南西区域の西側は中世の遺構がほとんど確認できない範囲である。この範囲のさらに西には犬川が南北に流れており、中世開田集落と神足集落の境界を想定できる。ただし、この範囲をより正しく評価するためには、犬川の整備時期や河川の氾濫による影響を詳しく解明する必要がある。

注１）日下雅義・植村善博「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一　1991年
２）小田桐　淳他『長岡京跡右京六条二坊二町・三町の調査』『長岡京市センター報告書』第10集　1997年
３）岩崎　誠『長岡京跡右京第606次・神足遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第14集　1999年
４）岩崎　誠・木村泰彦他『長岡京市センター報告書』第26集　2002年
５）小畑佳子『長岡京跡右京第641次・開田遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第16集　1999年
６）木村泰彦「長岡京期の遺構　小結」『長岡京市センター報告書』第26集　2002年
７）岩崎　誠『長岡京市センター報告書』第29集　2003年

付表－２　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい751じはっくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第751次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３０集
編著者名	中島　皆夫
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡（右京第751次） かいでんいせき 開田遺跡 こうたりいせき 神足遺跡	ながおかきょうしかいでん 長岡京市開田 二丁目地内	26209	107 080 083	34度55分 13秒	135度42分 03秒	20021022 ～ 20021125	160㎡	市道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第751次）	都城跡	長岡京期	土坑	土師器、須恵器	
開田遺跡・神足遺跡	集落跡	鎌倉～室町時代 江戸時代 時期不明	柵・溝・土坑 溝 溝・土坑	土師器、瓦器、炉壁 土師器、陶磁器	

図　　版

（１）南調査区中近世遺構（北から）

（２）南調査区完掘状況（北から）

長岡京跡右京第751次調査

（1）北調査区中近世遺構（南から）

（2）北調査区完掘状況（北西から）

（１）溝ＳD01（南から）

（２）柵ＳA11・12（西から）

（３）土坑ＳK10（北から）

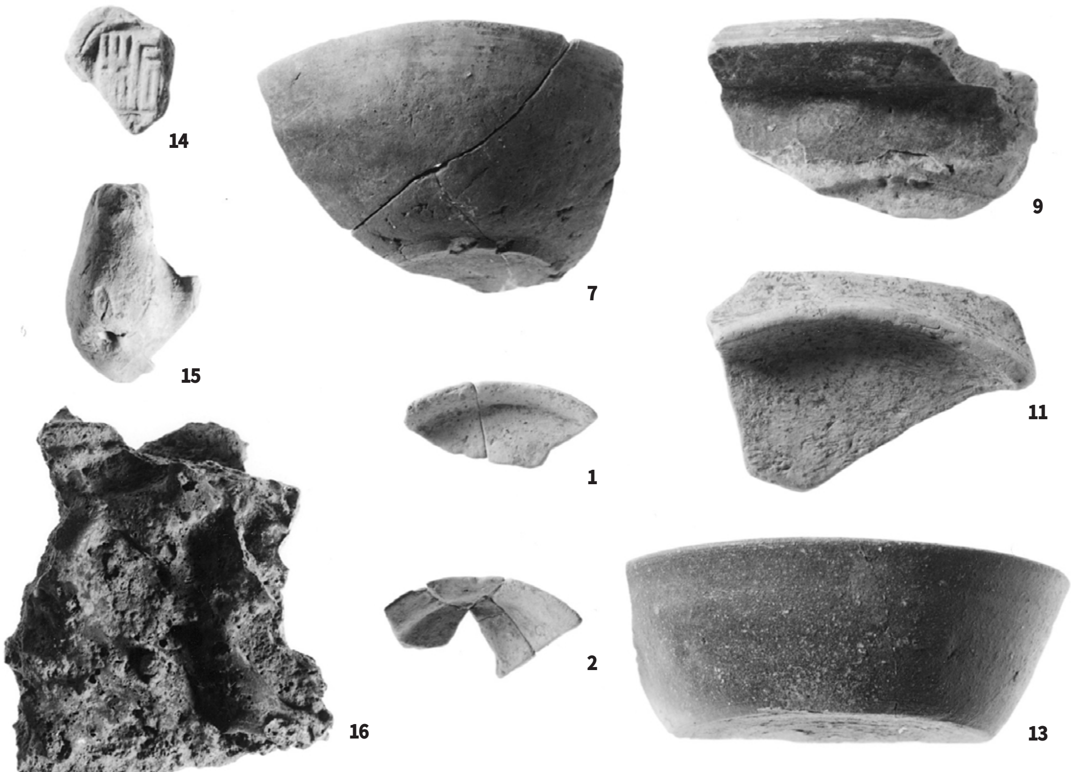
（４）土坑ＳK08（南東から）

（５）溝ＳD07（西から）

（６）土坑ＳK13（南から）

（１）南調査区溝ＳD03（北西から）

（２）北調査区溝ＳD03（北西から）



（３）出土遺物

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第３０集

平成15(2003)年２月27日　印刷
平成15(2003)年２月28日　発行

編集発行　　財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622
FAX　075－951－0427
印　　刷　　株式会社　図書印刷　同朋舎
〒600－8805　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075－361－9121(代)
FAX　075－371－0666